

「日本の酪農の違うところ(後編)」

こんにちは。僕は家畜飼育隊員として牧場で働いていることから、前回に引き続きアドバイザーとしての視点から見たマラウイの酪農を伝えたいと思います。

一昔前、日本では BSE(狂牛病)問題が世間を賑わせた際に、食への安全性からトレーサビリティが有名になりましたが(全国統一の番号により出生から解体までの流通経路を容易に知ることができるようになっていきます)、それが出来るようになったのは、耳に個体ごとの識別タグが取り付けられているためです。しかし、ここマラウイでは全国統一の番号制は存在せず、かつ牧場内での管理用ナンバーのタグも付いていたり、付いていなかったりします。また、個体毎のデータや交配記録も活用しないので近親交配すらも分からないといった状態です。

酪農においては、繁殖させ、牛乳を得ることが一番の目的のために、約 21 日周期で起こる発情を発見し、妊娠させることがとても重要です。しかし、発情を見つけようと放牧時の様子を放牧担当者達に聞くことや、朝・夕の 2 回観察をすることが必要にも関わらず、カウンターパートである牧場の主任(牧場内で、発情を見つけて人工授精を行えるのはこの人だけです)は朝の 1 度、牛の動きを離れたところから数分見る程度しか観察していません。

4 月の初旬から中旬にかけて、メイズ(トウモロコシの一種で白い粒が特徴です)が枯れ始めたのを合図にサイレージ(草を刈り取った後、踏み固めてビニールで完全に密封して、発酵させ、長期間使える飼料)を作成していたので立ち会ったところ、詰め込みから封入までおよそ 2 週間を要し、既に側面ではカビが発生していました。そして、サイレージの作成場所は土手を掘って 3 辺が土の壁になっている所なのですが、水分と空気をメイズ由来のもので全てまかない、空気が入らないように密封するために使う為のプラスチックシートも張られていない土の上で作成していました。詰め込み密度も甘く、鎮圧させる為に使っていたトラクターが空転して動かなくなる程「ふわふわ」の状態でも上部をシートで覆い、土を 2 cm、そのシートの上に均一に被せて終わりであり、重しも乗せていない状態でした。このシートにも問題があり、長さ 50 m、横幅 2 m のロールになっている薄く黒いシートを使って、1 重で覆っているだけなので密封には程遠く、雨などは簡単に内部に浸入してしまう危険性があります。

前回、そして今回は、僕の活動の場である酪農において、牛から見えるマラウイの問題点について触れましたが、いかがだったでしょうか。約 85%の国民が農業に携わっているマラウイにおいて、牛は大変貴重な財産です。牛を持ちたいと多くの農家さんは思っていますが、目先の利益しか見えていないために、専門知識を持たずに牛を飼育している農家も多々あります。ここで、僕が先輩隊員から聞いた話の一つをご紹介します。

佐藤健大さん(平成 23 年 4 月)

ある農家さんが、牛が乳を出さないから診て欲しいとの事で訪れたところ、その牛は分娩をしていないということが分かりました。初歩的なことですが、その農家さんは分娩して仔牛が産まれてから乳を出すということを知らなかったのです。日本ではありえないことですが、ここからマラウイならではの原因も見えてきます。

識字率というのを皆さんは聞いたことがあるでしょうか。読み書きが出来るか否かを表したこの数値は、マラウイではなんと 60%程です。小学校を例にとると、5 人に 1 人しか卒業していません。学校にいけない子がたくさんいるマラウイにおいて、多くのマラウイ人は情報を耳に頼っています。そのため、本や専門書での正確な情報ではなく、人から聞いた情報で牛を飼うという場合も多いのです。その際、「牛を飼えば、牛乳を手に入れることが出来、牛乳も牛も売れば良い金になる。」という偏った情報に惑わされてしまうという事が往々にして起こってしまいがちなのです。

僕は、牛に期待を賭けている農家さんの収入向上を支援するため、任地である牧場から、マラウイ全土の酪農に関わる情報を発信して行きたいと思っています。



サイレージ作り



トラクター立ち往生



マラウイの子どもたち